

2020年度福祉社会開発研究センター研究紀要

資 料

活動報告



## 東洋大学福祉社会開発研究センター 活動報告

### I 合同活動の報告

#### 1 東洋大学福祉社会開発研究センターシンポジウム等

##### (1) キックオフミーティングの開催

日 程：2020年6月8日

参加者：全研究分担者

方 法：Webexミーティング

概 要：全研究分担者が集ってのキックオフミーティングをオンライン形式で開催した。2020年度も文学部・社会学部・理工学部・国際学部・ライフデザイン学部の研究員20名、客員研究員16名、RAら6名という文理融合の研究体制の下、金子光一センター長、志村健一副センター長を中心に多様な研究を進めていくことを共有した。

##### (2) 国際（共催）シンポジウムの開催

日 程：2020年12月6日

会 場：東洋大学白山校舎8号館7階特別会議室（※参加者はオンライン参加）

テーマ：ICT（情報通信技術）と子どもの権利—韓国・台湾・日本の取り組み

主 催：国連NGO/NPO法人・子どもの権利条約総合研究所

共 催：東洋大学福祉社会開発研究センター

成 果：国連子どもの権利委員会の一般的意見25号やユニセフ報告書『つながる世界で成長する私たち』等に示されるデジタル環境における子どもの権利の尊重と促進に関する指針を踏まえた上で、韓国・台湾・日本から、ICTと子どもをめぐる現状について報告頂いた。デジタル環境における子どもの権利の尊重と促進のために、リスクを最小限に抑え、利益を最大限に活かすためにはどのような配慮や支援が行われているか、また今後の課題について議論を行った。

##### (3) 年度末シンポジウムの開催

日 程：2021年3月14日

参加者：センター関係者、コメンテーター・横山真男氏（明星大学・教授）・小山隆氏（同志社大学・教授）

会 場：Webexミーティング

成 果：「コロナ禍におけるつながりの創造と開発—ICTの可能性と課題—」というテーマの下、オンラインによるシンポジウムを開催した。各ユニットの研究報告（2020年度版）を行うとともに、コロナ禍にお

けるICTの活用が他者とのつながりにどのような影響があるのかについて、福祉的観点から検討を行った。

## 2 紀要『福祉社会開発研究』第13号の発行

規 格：A4判 130ページ

部 数：250部

内 容：論文他 11本（「紀要」目次参照）

成 果：本センターの研究代表者・研究分担者・客員研究員・研究協力者・RAらが執筆した論文等を掲載した紀要を大学等関係機関・センター関係者に配布し、本センターの研究内容・研究成果の一端を示した。

## 3 東洋大学福祉社会開発研究センター広報活動

ニュースレターの発行

①第1号：2020年 9月発行

②第2号：2021年 1月発行

③第3号：2021年 2月発行

④第4号：2021年 3月発行

## 4 センターの運営

### (1) 評価委員会の開催

日 程：2021年3月15日

会 場：Webexミーティング

### (2) センター会議の開催

第1回センター会議

日 程：2020年5月18日

会 場：Webexミーティング

第2回センター会議

日 程：2020年11月16日

会 場：Webexミーティング

第3回センター会議

日 程：2021年2月4日

会 場：Webexミーティング

第4回センター会議

日 程：2021年2月22日

会 場：Webexミーティング

第5回センター会議

日 程：2021年3月31日

会 場：Webexミーティング

## II 各ユニットの活動報告

### SPA1ユニット

#### 公開研究会の開催

##### 第1回公開研究会

日 程：2020年6月29日

会 場：Webexミーティング

概 要：金子光一研究代表者が「相互に認め合う社会の構築～新たな価値の創造に向けて」に関する研究報告を行った。とりわけロバート・オウエンの「相互承認」に関する検討を行い、相互に認め合う社会の構築に向けた議論を展開した。

##### 第2回公開研究会

日 程：2020年7月30日

会 場：Webexミーティング

概 要：稲沢公一研究分担者が「『福祉理論』という視座—フィクションとしての福祉を構築する試み—」に関する研究報告を行った。実証的な成果を蓄積してきた帰納法的な方法での「福祉とは何か」という問いではなく、演繹的方法から「理論福祉」として構築して必要性を確認しあった。

##### 第3回公開研究会

日 程：2020年11月16日

会 場：Webexミーティング

概 要：三重野清顕研究分担者が「ヘーゲルの承認論」について研究報告を行った。本ユニットで検討されている「相互承認」の「承認」概念はドイツ古典哲学の社会哲学の1つの軸であり、現代的な課題と応用して議論する必要性を確認した。

##### 第4回公開研究会

日 程：2021年2月25日

会 場：Webexミーティング

概 要：形岡拓文客員研究員が「障害者福祉の基礎付けの条件としての相互承認」に関して報告を行った。

#### 2020年度SPA1ユニット総括研究会

日 程：2021年3月6日

会 場：Webexミーティング

概 要：「現代の相互承認に関する福祉の実践と理論の交流」というテーマで公開総括研究会を開催した。これまで行われた（相互）承認論に関する理論的な検討を踏まえ、それらが現代社会の具体的な課題とどのように切り結ぶかについて、実践者と研究者との間での対話を行い、課題検討のための論点を見出した。

#### 論文・学会発表等

##### （書籍）

題 目：第1章 社会正義・人権・集団的責任・多様性尊重とソーシャルワークのグローバル定義——「ソーシャルワークの中核をなす諸原理」の関係性を考える

著 者：金子光一

書 名：社会を変えるソーシャルワーク

出版日：2020年4月30日

##### （論文）

題 目：相互に認め合う社会の構築に関する一考察—オウエンの思想を基盤として—

著 者：金子光一

書 名：福祉社会開発研究第13号

出版日：2021年3月

題 目：コーディネーターが行う個人支援における直接支援と間接支援の意義—資源の支援ネットワーク化とネットワークタイプ—

著 者：榎本涼子、浦田愛、小林良二

書 名：福祉社会開発研究第13号

出版日：2021年3月

題 目：昭和初期の産業組合保健婦事業に関する一考察-「集団的責任」の原理に着目して-

著 者：越前聡美

書 名：福祉社会開発研究第13号

出版日：2021年3月

SPA2ユニット

勉強会

日 程：2020年10月16日

会 場：Webexミーティング

報告者：伊奈川秀和研究分担者

テーマ：「フランスの社会保障の動向と情報化」

成 果：フランスの社会保障に関する各種指標等の動向、社会保障財政の動向、社会保障制度の外観、近年の制度改革等の動向について紹介し、フランスでの遠隔診療等の情報化を中心として報告した。また遠隔診療により国内にいながら海外の受診の可能性やその問題点、更にデータの集積と特定健診・保険指導、介護予防等との関係という日本における課題が指摘された。

公開研究会

日 程：2021年1月8日

会 場：Webexミーティング

登壇者：大澤範恭氏（AIP経営労務合同会社／AIP社会保険労務士・行政書士事務所代表）

テーマ：「医療・介護・保育の賃金制度の在り方」

成 果：大澤氏は賃金の基本的な構造、介護職員、保育士等の処遇現状について説明し、社会福祉分野における処遇改善という大きな課題を指摘して今後の見直しの方向性について、報告した。OECDの報告書でも、情報化が就労現場の環境改善につながる事が指摘される中、福祉の現場の人事・労務管理の改善の必要性が浮き彫りになった。

論文・学会発表等

(論文)

題 目：フランス社会保障における個人情報保護に関する考察

著 者：伊奈川秀和

書 名：福祉社会開発研究第13号

出版日：2021年3月

SPA3ユニット

(1) 定例研究会の開催

第1回定例研究会

日 程：2020年6月22日

会 場：Webexミーティング

参加者：加山弾（分）・山本美香（分）・早坂聡久（分）・高野聡子（分）・小櫃俊介（客）・越前聡美・上西一貴（RA）・劉鵬瑤（RA）

報告者：①早坂聡久研究分担者②山本美香研究分担者

テーマ：①「社会福祉法人の経営実態について2018年度現況報告書及び財務諸表より」

②「桐ヶ丘団地における住民の食行動に関するアンケート調査」

情報提供：小櫃俊介客員研究員「コロナ禍における特別養護老人ホームのICTを用いた家族の面会対応について  
—中間報告—」

成果：早坂研究分担者はインターネット上で公開されている「社会福祉法人財務諸表公表システム」を用いて、社会福祉法人の経営実態、事業継承を含む経営指向性を把握し、地域共生社会における役割について報告した。運営事業・施設の種類によって、求められる社会的役割も異なる状況となっており、社会福祉法人の経営実態のみならず、事業継承や他法人との連携等にかかる経営戦略や経営指向性を明らかにすることが求められている点を明らかにした。山本研究分担者は団地における住民の食行動に関するアンケート調査の結果をめぐって報告を行った。団地に居住する65歳以上の高齢者を対象に、主に食に関する意識や行動、状況について把握することを目的とし、今後団地内においてどのような食に関わる支援態勢をとる必要があるかについて考察を行った。小櫃客員研究員は「コロナ禍における特別養護老人ホームのICTを用いた家族の面会対応について」をテーマとして、新型コロナウイルス国内の主な動向や国内・東京都の社会福祉施設等への対応に関する情報を提供した。

## 第2回定例研究会

日程：2020年8月5日

会場：Webexミーティング

参加者：加山弾（分）・山本美香（分）・早坂聡久（分）・高野聡子（分）・小櫃俊介（客）・越前聡美・上西一貴（RA）・劉鵬瑤（RA）

報告者：小櫃俊介客員研究員

テーマ：「コロナ禍における特別養護老人ホームのICTを用いた家族の面会対応について 中間報告・第2報」

成果：小櫃客員研究員が「コロナ禍における特別養護老人ホームのICTを用いた家族の面会対応について～中間報告・第2報」について報告した。新型コロナウイルス感染拡大に伴い高齢者施設内における感染リスクが高まったため、利用者－家族、利用者－利用者、利用者－職員間の接触は最低限のものにならざるを得ない状況となった。さらに利用者－家族間の面会に着目し、全国の特別養護老人ホームにおいて、ICTを用いた「家族との面会」の実施状況、その手段や内容に関する調査結果を説明した。ICTを用いて面会するのは、感染リスクを控えるなどメリットがある一方、スマートフォンの普及率が低い、インターネット環境未整備、マニュアル公開の不十分など問題が指摘された。

## 第3回定例研究会

日程：2020年12月8日

会場：Webexミーティング

参加者：加山弾（分）・山本美香（分）・早坂聡久（分）・高野聡子（分）・小櫃俊介（客）・上西一貴（RA）・劉鵬瑤（RA）



報告者：加山弾研究分担者

テーマ：「地域共生社会へ向けた政策展開とアウトリーチーコミュニティソーシャルワークにおけるICT活用を模索してー」

成果：制度の狭間にいる人々への支援の必要性和実効性のあるアウトリーチに関する報告を行った。また近年の政策展開における自治体・実践主体の裁量権の与えられた状況とアウトリーチの拡張（従来型に加え、情報空間へのアプローチ、生活圏域を単位とする総合相談窓口の設置、住民・当事者による協議、SNSや広報媒体を用いた普及活動等）について、またそこで見られるICTの活用と可能性・課題についての議論が展開できた。

#### 第4回定例研究会

日程：2021年2月12日

会場：Webexミーティング

参加者：加山弾（分）・山本美香（分）・早坂聡久（分）・高野聡子（分）・小櫃俊介（客）・劉鵬瑤（RA）

報告者：①高野聡子研究分担者②劉鵬瑤RA

テーマ：①特別支援教育における非対面授業の現状とICTの活用について：新型コロナウイルス感染症下の特別支援学校（肢体不自由）を中心として」

②「コロナ禍の中国都市部社区における『ICT+網格化管理』モデルの実践」

成果：高野研究分担者は、日本における特別支援教育の現状を説明し、臨時休校開始後の特別支援学校の実態とICTの活用の可能性について報告した。劉RAは、コロナ禍において中国都市部の社区住民への網格化管理の仕組みの実施を紹介し、ICT活用による住民への支援特徴を事例と合わせて説明した。

#### (2) 公開研究会・シンポジウムの開催

##### 公開研究会

日程：2020年10月6日

会場：Webexミーティング

参加者：21名

報告者：柴田邦昭氏（柴田社会福祉士事務所 代表）

テーマ：「独立型社会福祉士のソーシャルワーク実践」

成果：柴田邦昭氏は社会福祉士の全体的現状、独立型社会福祉士の概念、名簿登録要件について説明し、多様な福祉課題を抱える家族の事例を用いて独立型社会福祉士のソーシャルワーク実践における課題を指摘し、新型コロナ禍におけるICT活用の実践について報告した。

##### シンポジウム

日程：2020年12月19日

会場：WebEx Events

参加者：67名

テーマ：「コロナ禍や災害による〈分断〉を〈つながり〉に－社会福祉実践におけるICTの可能性と課題－」

内 容：

【報告者・テーマ】

- ①城戸学氏 (株式会社テンフィートライト マーケット開発ユニット ユニットマネージャ 防災士)「災害発生時の地域コミュニティとICTによる共助」
- ②四ノ宮力氏 (アイラ株式会社 代表取締役)「会津若松市のICTを活用した“みなとチャンネル”のコミュニティ活性化」
- ③長峰夏樹氏 (長野県社会福祉協議会 まちづくりボランティアセンター 所長)「ICTの活用による災害時要支援者情報を包括的に把握する仕組み」
- ④福澤信輔氏 (長野県社会福祉協議会 まちづくりボランティアセンター 主任)「コロナ禍の中で長野県内で多様な主体とつながりを絶やさないICTの活用の仕組み」
- ⑤宮本隆史氏 (社会福祉法人善光会 理事 最高執行責任者 統括施設局長)「社会福祉施設におけるICT・介護ロボット等の導入」

【コメンテーター】

- ①山本美香 (東洋大学・教授／日本地域福祉学会・事務局長／SPA-3ユニット研究分担者)
- ②早坂聡久 (東洋大学・准教授／SPA-3ユニット研究分担者)

【コーディネーター】

加山弾 (東洋大学・教授／日本地域福祉学会・関東甲信越静部会担当理事／SPA-3ユニット長)

【総合司会】

小櫃俊介 (一般社団法人ORINAS代表／SPA-3ユニット客員研究員)

成 果：新型コロナウイルスの感染拡大は、福祉がこれまで大切にしてきた「集うこと、交わること」を根底から否定するものだった。また、震災や豪雨など相次ぐ大規模災害は、私たちの平穏な日常を瞬時に奪い、生命や人生の危機となる。一方、進展著しいICTは、社会福祉においても重要な要素となりつつあり、緊急時の安否確認、IoTによる見守り、オンラインでの面会、専門職間の情報共有、コミュニティ機能維持など、さまざまに模索されている。本シンポジウムは、コロナ禍や災害などの災禍を見越して、社会福祉実践におけるICT活用の先進事例に学び、これからの展望やさまざまな可能性、課題などを共有できた。

論文・学会発表等

(書籍)

題 目：第5章 地域を支援するソーシャルワーク——社会的孤立を乗り越えるための視座・技法

著 者：加山弾

書 名：社会を変えるソーシャルワーク

出版日：2020年4月30日

書名：ストーリーで学ぶ地域福祉  
著者：加山弾、熊田博喜、中島修、山本美香（共著）  
出版日：2020年7月

(論文)

題目：地域共生社会に向けた政策展開とアウトリーチの必要性—コミュニティソーシャルワークを中心に—  
著者：加山弾  
書名：ソーシャルワーク研究  
出版日：2021年1月

題目：コロナ禍の中国都市部社区における「ICT+網格化管理」モデルの実践  
著者：劉鵬瑤  
書名：福祉社会開発研究第13号  
出版日：2021年3月

SW（高齢）ユニット
------------

公開シンポジウム

日程：2020年10月3日  
会場：Webexミーティング  
登壇者：来栖宏二氏（アゼリーグループ理事長）・諸岡学氏（HR統括）  
テーマ：「介護の世界をデジタルライズで大改革」

概要：介護業界におけるデジタル化の必要性及びその具体的な実践事例について報告があった。ボトムアップで現場のデジタル化を推し進めているが、世代間でデジタル化に対する認識には大きな開きがあり、そのメリットをアナログ世代にも理解してもらっていくことが課題として挙げられた。デジタル化にあたって重要な点は、身近にできることから考えていく、成功体験の積み重ね、それを可能にする【範囲内での権限移譲】にあると指摘があった。

論文・学会発表等

(学会)

題目：通所系介護サービス事業所における利用者のADL変化に関する実態調査  
報告者：古川和稔、小平めぐみ  
学会：第28回日本介護福祉学会大会  
日程：2020年10月31日  
成果：オンライン開催となり、資料のみの公開となった。

(論文)

題 目：COVID-19拡大による介護実習中止に伴う学内振替学修に関する報告  
——ICTを活用した学修プログラムの成果と課題——

著 者：古川和稔

書 名：福祉社会開発研究第13号

出版日：2021年3月

題 目：通所系介護サービス事業所における利用者のADL変化と情報共有に関する実態調査

著 者：古川和稔

書 名：福祉社会開発研究第13号

出版日：2021年3月

SW (障がい) ユニット
---------------

研究会

第1回定例研究会

日 程：2020年7月20日

会 場：Webexミーティング

概 要：あいのわ福祉会の桑原氏から、センター貸与iPadの利用状況について報告があった。iPadと既存のアプリを利用して、知的障害がある利用者の体重管理や作業集中を支援しているとのことであった。ゆたかカレッジの芳賀氏から、センター貸与iPadの利用計画について報告があった。利用者のアルバイトの支援としてのレジ打ち練習や、利用者による研究活動での利用可能性があるとのことであった。共通するものとして、屋外での利用にはインターネット環境が整備されていなければ活用しにくいという課題が報告された。

第2回定例研究会

日 程：2020年9月27日

会 場：Webexミーティング

概 要：門下祐子客員研究員より知的障がいのある人たちの性教育について報告があった。現在、性の権利としての包括的性教育が国際的に取り組まれている一方で、日本国内の知的障がいのある人への性教育は十分に取り組まれていない現状があることが課題として指摘された。今後は、知的障がいのある人への性教育や性の支援に関する実態調査に取り組んでいくとのことであった。

第3回定例研究会

日 程：2020年10月31日

会 場：Webexミーティング

**概要：**岩田千亜紀研究協力者から障がいのある性暴力被害者について報告があった。現在、障害者の性暴力被害に関する調査研究は国内ではほとんど行われず、その実態が十分に明らかにされていないことなど課題が指摘された。特に性暴力被害の発生率が高いとされる、発達障害者や精神障害者への性暴力について、その実態や関連する要因を探る必要があると問題提起がなされた。また、そうした性暴力被害にあった障害者に対してのICTを活用した支援方法などについても報告があった。

#### 第4回定例研究会

**日程：**2020年12月20日

**会場：**Webexミーティング

**概要：**奥西RAより重い知的障がいのある人と支援者の関係形成について報告があった。従来の研究では、知的障がいのある人の行動変容を目的として研究が積み重ねられてきたが、一方で関係性に焦点化した議論は十分になされていないと課題の指摘があった。今後は、関係形成のプロセスやそれに寄与する要因を検討していく必要があるとのことだった。

#### 公開研究会・シンポジウムの開催

(緊急企画シンポジウム)

**日程：**2020年6月28日

**会場：**Webex Events

**登壇者：**渡邊浩美客員研究員（公益財団法人スペシャルオリンピックス日本 業務推進部長）、三宮華子氏（キートン・コム スマホ活用アドバイザー／練馬区高齢者センタースマホ講師）、永廣証人氏（港区自立支援協議会 委員／OriHime パイロット）

**概要：**本シンポジウムでは「自粛生活中の障がいのある人たちにICTができること」をテーマに、新型コロナウイルス感染拡大により世界的に自粛生活が求められた中、それが障がいのある人たちにどのような影響を与えてきたのか、そして ICT 利用の観点から何ができたのか、何ができるのかについて報告・検討した。

(公開シンポジウム)

**日程：**2021年1月30日

**会場：**Webex Meetings

**登壇者：**桑原祐生氏（社会福祉法人あいのわ福祉会 足立区大谷田障がい福祉施設 副施設長）、渡邊浩美客員研究員（公益財団法人スペシャルオリンピックス日本 業務推進部長）、大川秀治氏（NPO法人ステップベース 代表理事／オリィの自由研究部（β））

**概要：**本シンポジウムでは「コロナ禍におけるICT&IoT利活用による障害者支援」をテーマに、各登壇者からコロナ禍でのICT、IoT利活用の取り組みについて紹介があり、今後の障害者支援における課題や可能性について検討が行われた。

(書籍)

題 目：第2章 ソーシャルワークのグローバル定義を読み解く——アジア太平洋地域・日本における展開

著 者：志村健一

書 名：社会を変えるソーシャルワーク

出版日：2020年4月30日

題 目：第3章 価値・倫理と専門性の関係——ソーシャルワークにおける「幸福」を考える

著 者：高山直樹

書 名：社会を変えるソーシャルワーク

出版日：2020年4月30日

(論文)

題 目：障害のある性暴力被害者へのICTを活用したソーシャルワーク支援の検討

著 者：岩田千亜紀

書 名：福祉社会開発研究第13号

出版日：2021年3月

(学会)

題 目：ポストコロナ時代の社会福祉支援におけるデジタルトランスフォーメーション  
——ICTを活用した社会福祉支援の方法の検討——

著 者：岩田千亜紀

日 程：11月14日～15日

成 果：ポストコロナ時代のICTを活用した社会福祉支援のあり方について口頭発表を行った。

SW (国際) ユニット
--------------

各種調査・研究

日 程：2020年11月5日・12日

担当者：佐藤亜樹

概 要：アザラシ型ロボット・パロを活用した動物介在療法（サポートグループ形式）がコロナ禍で孤立感を深めている大学生の心身に与える影響の検証を行った。その結果、動物型のロボットを介在させたグループセッションであっても、生身の動物を介在させた時と同様に、利用者に生理的・心理的なストレスを軽減させ、コミュニケーションを活発化させるなど、社会的効果を促進させる効果があることがわかった。

公開シンポジウム

日 程：2021年3月5日

会 場：Webex Meetings

登壇者：高柳友子氏（社会福祉法人 日本介助犬協会専務理事）、長江千愛氏（聖マリアンナ医科大学病院・小児科医）、大塚敦子氏（ジャーナリスト・ノンフィクション作家）、柴田崇徳氏（産業技術総合研究所・パロ開発者・工学博士）

概 要：本シンポジウムでは「動物・動物型ロボットが人間の幸福に与える影響の検証」をテーマに、大きな社会的変化の中で、社会的に弱い立場におかれている高齢者や入院中の子ども等に対して、どのような動物介在療法が行われているのか、その実際と効果について、国内外でデータを収集し、専門的実践を行っておられるシンポジストの方々から話を伺った。

#### 論文・学会発表等

##### （書籍）

題 目：第4章 人と環境の相互作用を理解するための価値・知識・技術

著 者：佐藤亜樹

書 名：社会を変えるソーシャルワーク

出版日：2020年4月30日

題 目：第6章 グローバル化と向き合うソーシャルワーク——国際移住者を支援するための視座・技法

著 者：荻野剛史

書 名：社会を変えるソーシャルワーク

出版日：2020年4月30日

##### （書籍：翻訳）

題 目：第11章 4～5年生によって実施されたエンパワメント評価（p.255-303）、第14章 10年間の喫煙予防新事業におけるエンパワメント評価と評価に必要な対処能力の構築（p.369-394）の翻訳担当

著 者：デヴィッド・M・フェッターマン、シャケ・J・カフタリアン、アブラハム・ワンダーズマン

書 名：コミュニティの社会活動におけるエンパワメント評価～福祉、教育、医療、心理に関する「参加と協働」の実践知～

出版日：2020年9月30日

##### （書籍：監訳）

題 目：第5章 スクールソーシャルワーク・スーパービジョン（p.66-80）、第13章 学校におけるいじめとセクシュアル・ハラスメント（p.199-212）、第20章 学校での抑圧と戦うための取り組み（p.327-344）、第21章 組織としての学校（p.345-361）、第22章 政策開発とスクールソーシャルワーカー（p.362-373）の監訳を担当

著 者：キャロル・リップペイ・マサット、マイケル・S・ケリー、ロバート・コンスタブル（編）

書 名：スクールソーシャルワークハンドブック実践・政策・研究

出版日：2020年11月30日

(論文)

題 目：ソーシャルワーク教育が学生の共感性に与える影響に関する研究

著 者：佐藤亜樹

書 名：福祉社会開発研究第13号

出版日：2021年3月

(学会)

題 目：A Preliminary Study: The Influence That Social Work Internship Has on Students' Dispositional Empathy

報告者：Aki Sato

学 会：Society for Social Work and Research

日 程：2020年1月22日 13:15-14:15 (USA Eastern Time Zone)

成 果：Oral Presentation

SW (子ども) ユニット
---------------

東日本大震災子ども・若者支援研究会 第1回目

日 程：2020年4月10日

会 場：オンライン (ZOOM)

担当者：森田明美 (分)・清水冬樹 (客)

参加者：6名 (東北関係者4名)

成 果：沿岸部で子育てをしている保護者や支えている専門職の現状について意見交換を行った。合わせて研究計画についても議論を行った。

東日本大震災子ども・若者支援研究会 第2回目

日 程：2020年5月4日

会 場：オンライン (ZOOM)

担当者：森田明美 (分)・清水冬樹 (客)

参加者：5名 (東北関係者3名)

成 果：コロナ禍の地方における子育ての現状と震災の影響に関する調査を実施することで確認をした。

東日本大震災子ども・若者支援研究会 第3回目

日 程：2020年5月30日

会 場：オンライン (ZOOM)

担当者：森田明美 (分)・清水冬樹 (客)

参加者：5名 (東北関係者3名)

成 果：夏以降の若者支援の方向性について確認をした。



東日本大震災子ども・若者支援研究会 第4回目

日 程：2020年9月10日

会 場：オンライン（ZOOM）

担当者：森田明美（分）・清水冬樹（客）

参加者：5名（東北関係者2名、研究支援者1名）

成 果：調査フィールド石巻と南三陸とすることを決定した。

東日本大震災子ども・若者支援研究会 第5回目

日 程：2020年10月8日

会 場：オンライン（ZOOM）

担当者：森田明美（分）・清水冬樹（客）

参加者：4名（東北関係者2名）

成 果：調査方法と質問し調査の項目を議論した。

東日本大震災子ども・若者支援研究会 第6回目

日 程：2020年11月5日

会 場：オンライン（ZOOM）

担当者：森田明美（分）・清水冬樹（客）

参加者：4名（東北関係者2名）

成 果：調査対象として、新たに南相馬市も含めることとした。調査項目を確定させ、オンライン上で調査票を作成した。  
震災から10年を迎えようとする中で、これまで展開されてきた子ども・若者支援の評価について、行政担当者との議論の場を設けることも確認した。

東日本大震災子ども・若者支援研究会 第7回目

日 程：2020年12月11日

会 場：オンライン（ZOOM）

担当者：森田明美（分）・清水冬樹（客）

参加者：5名（東北関係者3名）

成 果：調査が開始されたことを確認した。

県議会議員より、宮城県の子ども・若者施策に関する情報交換を実施した。

2021年3月のシンポジウムについての意見交換を実施した。

東日本大震災子ども・若者支援研究会 第8回目

日 程：2020年12月25日

会 場：オンライン（ZOOM）

担当者：森田明美（分）・清水冬樹（客）

参加者：5名（東北関係者3名）

成 果：県議会議員2名と、今後の子ども・若者施策のあり方について意見交換を行った。

#### 東日本大震災子ども・若者支援研究会 第9回目

日 程：2021年1月7日

会 場：オンライン（ZOOM）

担当者：森田明美（分）・清水冬樹（客）

参加者：5名（東北関係者3名）

成 果：調査の進捗状況について情報共有し、3月のシンポジウムについての議論を行った。

#### 東日本大震災子ども・若者支援研究会 第10回目

日 程：2021年2月4日

会 場：オンライン（ZOOM）

担当者：森田明美（分）・清水冬樹（客）

参加者：5名（東北関係者3名）

成 果：調査結果について報告を行った。3月のシンポジウムについての議論を行った。

#### 世田谷区との研究会①

日 程：2020年5月29日

会 場：烏山総合支所 2階 第2会議室とZOOM併用

担当者：森田明美（分）・上田美香（客）・我謝美佐子（客）・小林恵一（客）

参加者：世田谷区職員（子ども家庭支援センター、区立保育所園長、保育課）

成 果：前期の研究成果報告と今年度の研究趣旨説明および児童相談所設置にむけて

#### 世田谷区との研究会②

日 程：2020年6月19日

会 場：烏山総合支所 2階 第2会議室とZOOM併用

担当者：森田明美（分）・上田美香（客）・我謝美佐子（客）・小林恵一（客）

参加者：世田谷区職員（子ども家庭支援センター、区立保育所園長、保育課）

成 果：世田谷区の現状確認とアセスメントシートの試行事例について報告と意見交換。研修内容の検討。

#### 世田谷区との研究会③

日 程：2020年10月16日

会 場：烏山総合支所 2階 第2会議室とZOOM併用

担当者：森田明美（分）・上田美香（客）・我謝美佐子（客）・小林恵一（客）

参加者：世田谷区職員（子ども家庭支援センター、区立保育所園長、保育課）

成 果：「語りたいことシート」の試行報告と意見交換、ケースのモニタリング、スーパービジョンのありかたを検討。

#### 世田谷区との研究会④

日 程：2020年11月13日

会 場：世田谷区役所第1庁舎 庁議室とZOOM併用

参加者：世田谷区職員9人

成 果：区内3か所の母子生活支援の施設長から施設の強み、施設のあり方（施設内保育、人材育成、アフターケア、課題等）、今後の展望についてプレゼンテーション実施。

#### 世田谷区との研究会⑤

日 程：2020年12月18日

会 場：烏山総合支所 2階 第2会議室とZOOM併用

担当者：森田明美（分）・上田美香（客）・我謝美佐子（客）・小林恵一（客）

参加者：世田谷区職員（子ども家庭支援センター、区立保育所園長、保育課）

成 果：保育園におけるスーパービジョンのあり方や各種会議における共通ツールの検討。子育て支援ひろばにおける他機関連携の実践例の報告。

#### 世田谷区区民版子ども子育て会議

日 程：2020年8月21日

会 場：世田谷区各地域からオンライン

担当者：森田明美（分）

参加者：世田谷区職員（子ども家庭支援センター職員）

成 果：2020年度から始まる世田谷区の子ども計画について行政と市民と一緒に議論をする会に参加した。

#### 世田谷区と子どもと障害ユニットのコラボ事業

日 程：2020年9月27日

会 場：世田谷区下北沢駅小田急線跡特設広場

担当者：森田明美（分）・志村健一（分）・麗麗（RA）・尹曉珊（RA）

参加者：世田谷区職員（若者支援担当課9名）

成 果：障害のある若者がオリヒメ（分身ロボ）を通して、子どもや子育て家庭と交流する地域イベントへ参加するという実験的な試みを行った。共同参加をさせてもらい、子どもの年齢によるAIやICTへの反応の違い、オリヒメが子どもにとってはすでにメディアに登場している身近な存在になっていることを知ることができた。またコロナ禍の中で、あるがゆえにITネット環境へのアクセスが身近に感じる事が可能となる。

#### 和光市との連携

日 程：2020年8月17日

会 場：和光市役所会議室とZOOM併用

参加者：森田明美（分）・和光市役所職員・子育て支援関係者

成 果：和光市子ども計画の今後について議論した。

#### 母子生活支援施設あり方検討会①

日 程：2020年7月27日

会 場：世田谷区役所第1庁舎庁議室とZOOM併用

参加者：世田谷区職員8人

成 果：母子生活支援施設の建物や設備、施設の支援力等、現状分析の必要性や検討課題について整理を行い、今後の検討会の方向性について確認した。

#### 母子生活支援施設あり方検討会②

日 程：2020年10月30日

会 場：世田谷区役所第1庁舎庁議室とZOOM併用

参加者：世田谷区職員9人

成 果：母子生活支援施設の役割と課題における子ども家庭支援センターと母子生活支援施設の認識、母子生活支援施設の代替となる地域資源の整理、区として母子生活支援施設に求める支援基準の必要性、第三者評価の内容について意見交換を行った。その結果、次回の委員会で各施設長から今後の展望等プレゼンを実施することとなった。

#### 世田谷区との連携（スーパービジョン開催）

日 程：2020年度4回実施（6月・8月・9月・12月）

※2月以降は緊急事態宣言発出に伴い未定

会 場：パルメゾン上北沢

担当者：小林 恵一（SW/客）

参加者：パルメゾン上北沢職員

成 果：施設における母子家庭支援について当事者主体の取り組みを進めるためのスーパービジョンを展開し、アセスメント及び支援力を高めることができた。

#### 東京都こども未来会議での報告

日 程：2021年2月12日

会 場：Web会議

成 果：森田研究分担者が、コロナ禍でのICTを使った子どもの参加と居場所に関する報告を行った。

#### シンポジウム「復興を生きる若者たちからの提言」

日 程：2021年3月1日

会 場：宮城県議会1階ホール、ZOOM

担当者：森田明美（分）、清水冬樹（客）

参加者：50名

成 果：震災から10年を迎えようとする中、当時中高生だった若者たちが今どのように暮らし、今日までどのように育ってきたのかをデータと語りから明らかにしながら、震災ポスト10年の東北における子ども・若者支援のありかたについて、行政・県議会議員・支援者・若者たちとともに議論を行った。

## 論文・学会発表等

(学会)

題 目：農村留守児童の暮らしと出稼ぎの親に対する意識 ～内モンゴル自治区農牧地域における子ども調査から～

報告者：麗麗（RA）

学 会：日本モンゴル文化学会

日 程：2020年7月18日

成 果：調査対象者の中、親のいずれかが出稼ぎに行き（別居や家出を含む）、親のもう1人と暮らす農村留守児童が多く、また1年以上出稼ぎに行っている親が7割を占める。学校がある平日は学校寄宿舎で暮らす農村留守児童は6割を占め、週1回の頻度で出稼ぎの親と連絡をとる農村留守児童は4割であり、連絡の際に話す内容は主に勉強や成績に関することが7割であった。また、子どもは親の出稼ぎを「自分の将来のため？」と考えているが、農村留守児童が暮らす家庭において貧困、病気、DVや別居など多様な問題が存在していることが明らかとなった。

題 目：「東日本大震災における子ども・若者参画による長期的支援の検討」

報告者：清水冬樹客員研究員

学 会：一般社団法人日本社会福祉学会

日 程：2020年9月12日（土）～2020年10月12日（月）E-ポスター

成 果：被災経験がある若者たちから見た市民社会による支援の価値について明らかにした。

題 目：中国・上海市における0～3歳の子どもの保育に関する研究

—「上海市における0～3歳の嬰幼兒ケアサービス現状の分析研究報告」の評価検証—

報告者：尹曉珊（RA）

学 会：子どもの権利条約総合研究所 2020年度研究総会

日 程：2020年12月6日

成 果：上海市における0～3歳の嬰幼兒ケアサービス現状の分析研究報告」の評価検証を通して中国・上海市の現状と課題を明らかにした。

題 目：中国・内モンゴル自治区における農村留守児童支援に関する研究

～暮らしの場に対する子どもの思いに着目して～

報告者：麗麗 (RA)

学会：子どもの権利条約総合研究所 2020年度研究総会

日程：2020年12月6日

成果：調査対象者433名のうち、学校の寄宿舎に暮らす子どもは約7割を占めており、親と自宅と祖父母の家に暮らす子どもは2割を満たなく、親戚の家と民営寮に暮らす子どもは1割を満たない。以上のことから農村留守児童の主な暮らしの場は学校の寄宿舎、親と自宅、祖父母の家、親戚の家であることが明らかとなった。

(報告書)

題目：ICTの利用と被災経験が子育てに及ぼす影響に関する研究 報告書 (第一報)

著者：森田明美 (分)、清水冬樹 (客)

出版日：2021年3月31日

(その他)

日程：2020年12月20日 (日)

成果：特定非営利活動法人ワーカーズコープ北・南東北事業本部主催の「2020年度北・南東北合同1・2・3決起集会」において、清水がコメンテーターとしてオンラインで参加し、各拠点の取り組みに対してコメントをした。

(論文)

題目：オーストラリアの若年ホームレス支援に関する研究—出産と自立支援サポートモデルセンターを中心に—

著者：李玉賢、朴志允、森田明美 (翻訳：羅 妍智)

書名：福祉社会開発研究第13号

出版日：2021年3月

題目：中国の保育におけるICT活用の現状と課題

著者：尹曉珊

書名：福祉社会開発研究第13号

出版日：2021年3月

SEユニット

論文・学会発表等

(書籍)

書名：Pythonデータエンジニアリング入門 高速化とデバイスデータアクセスの基本と応用

著者：橋本 洋志、牧野 浩二、佐々木 智典、横田 祥

出版日：2020年4月27日、オーム社、ISBN: 9784274225345

題 目：Assistive Robots

著 者：Jinhua She、Yasuhiro Ohyama、Edward F. Fukushima、Sho Yokota

学 会：Developments in Advanced Control and Intelligent Automation for Complex Systems (Chapter 14)

出版日：2021年3月14日、Springer、ISBN-10 : 3030621464

(査読付国際会議論文)

題 目：Development of non-task-oriented dialogue system for human friendly robots.

著 者：Yoshitaka Yamane、Y. Sasaki、Y. Fujisaku、Satoshi Muramatsu、Katsuhiko Inagaki、Daisuke Chugo、Sho Yokota、Hiroshi Hashimoto

学 会：HSI 2020、IEEE 13th International Conference on Human System Interaction 日 程：2020年6月6日～8日

会 場：バーチャル（ホスト：東洋大学）

題 目：Development of a Walking Promotion Device using Arm Swing Induced by Parametric Excitation 1st report: Evaluation of arm swing focused on amplification rate

著 者：Kazuki Yamada、Sho YOKOTA、Akihiro Matsumoto、Daisuke Chugo、Hiroshi Hashimoto

学 会：IECON 2020- 46th Annual Conference of the IEEE Industrial Electronics Society

日 程：2020年10月18～21日

会 場：バーチャル（ホスト：Nanyang Technological University、Singapore）

題 目：Development of a Walking Promotion Device using Arm Swing Induced by Parametric Excitation Second report: Design of second prototype (Accepted)

著 者：Kazuki Yamada、Sho YOKOTA、Akihiro Matsumoto、Daisuke Chugo、Hiroshi Hashimoto

学 会：ICIT 2021- 22nd IEEE International Conference on Industrial Technology

日 程：2021年3月10～12日

会 場：バーチャル（ホスト：Valencia、Spain）

国際会議開催

日 程：2020年6月6日～8日

会議名：IEEE 13th International Conference on Human System Interaction

担当者：横田 祥（実行委員長）

会 場：オンライン（ホスト：東洋大学）

成 果：本会議は、情報通信技術に基づく人とシステムのインタラクション技術について、世界各国の研究者を集めて議論する場を提供することを目的として2008年に設立された。これまでにポーランド、イタリア、アメリカ、ポルトガル、イギリスなど世界各地で開催されており、今回の第13回目の開催は、HSIシリーズでは2回目の日本開催となった。本会議は、17の国と地域から75件の論文投稿があり、査読を経て65件の発表が行われた。発表やパネルディスカッションでは、人・ユーザ重視の共通基盤の基で、新しい情報通信、メデイ

ア処理手法、人とシステムの対話技術、また、AIを活用したロボティクス、インタフェース、支援システムを中心に議論し世界各国の研究者と意見交換することができた。